



凄腕のピアニスト
ホールで一夜限りのジャズライブ!



Kunitachi Debut Concert vol.12

TWIN PIANOS JAZZ

- 武本和大 × 田谷紘夢

開催報告 2020.2.14 Fri. Showtime_7:00 pm, Kunitachi Community Arts Center

1st Stage

My Favorite Things
Six Tree
Emily
Something's Happening

2nd Stage

Caravan
Mambo Inn
As Time Goes On
上を向いて歩こう
Moon River

Encore

DANGER THIRD RAIL

主催：(公財) くにたち文化・スポーツ振興財団 協力：国立音楽大学 後援 国立市教育委員会

お問合せ 公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団
Kunitachi Arts and sports Foundation

〒186-0003 東京都国立市富士見台2-48-1 くにたち市民芸術小ホール
TEL | 042-574-1515 EMAIL | hall@kuzaidan.or.jp

SUMMARY



影アナはなし。上演中の注意事項は画面に表示。風の音とともに文字が砕け散って暗転、出演者上手奥より登場。

チャレンジ

ホールでジャズライブを行う試み

平成 26 年 7 月に国立市と国立音楽大学との間で包括連携協定が締結されたことを踏まえ、大学の協力のもと、声楽や現代音楽など様々な分野の公演を行ってきました。

この度は、演奏者を指名依頼しての二台ピアノジャズの企画公演です。平日にもかかわらず来場者数 311 名を数え、良い評価を得ることが出来ました。

管楽器やベース、ドラムなどが入る構成に比べ、2台ピアノだけのジャズは聴く機会が少なく、一般的なジャズのイメージと差があるため、愛好者であればあるほど、自身の定義から外れたものを受け入れにくい恐れがあり、そういう意味ではチャレンジングな試みです。

くにたちデビューコンサートのシリーズは、マジョリティに与することなく、クオリティには譲歩せずして観客の裾野を広げ、新たな観客を育むことを目的とするものです。そのため、この度は以下の点に注力しています。

- (1) 圧倒的な演奏のクオリティを担保する
- (2) 初心者にもファンにも届くサプライズ感のある仕掛けをつくる
- (3) ライブハウスでは出来ないハイクオリティのピアノと音響・照明

武本和大、田谷紘夢という天才的な演奏家による優れた演奏はいうまでもなく、一般的なコンサートの枠を外し、音響、照明、調律の専門的知見を集めて、ストーリー性と意外性のある舞台構成を行うことで、会場に足を踏み入れた途端、観客が「非日常」に魅せられ、引き込まれることをねらうものです。

インスピレーションを得る体験

照明は空間を大きく変化させる要素です。前半の客席の照明にはブルーのLEDを使用。ライブハウスの雰囲気醸成だけでなく、鳥の声を合図に夕焼けから夜の帳がおりていく倉庫街のシーンを青の色調で horizont 幕に映し、これから始まる物語を演出。本ベル代わりの風音がやむと暗転しピアニストがスタンバイ、ピンスポットがあたると、“My Favorite Things”が始まります。



開場時にはスクリーンに Welcome! のメッセージ。上手奥のベンチと街灯。客電はブルーの LED 照明。



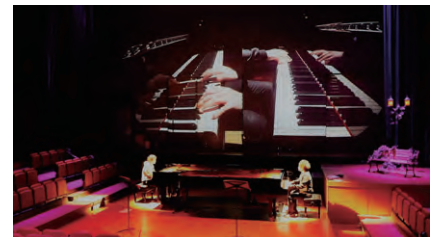
後半はホリ幕を飛ばしバックヤードの壁に映像を映す。地下鉄が通り過ぎたあとには構内の壁が映しだされる。



バックヤードの引戸を開けて壁からピアニスト登場！
(GP 時の映像)



車の音を合図にマンホールの蒸気の動画開始。同時にスモークがたかれ、二階通路よりゲスト奏者入場。



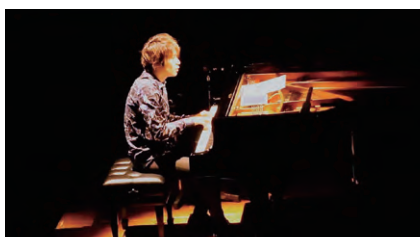
後半客席の照明はアンバーに変化。全 9 曲のうち 3 曲は GO-PRO のカメラで手元の映像を映した。(GP 時の映像)



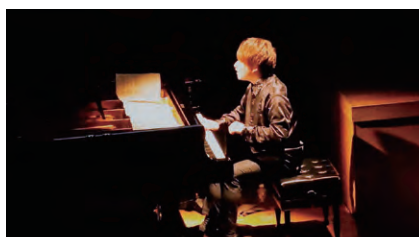
REPORT



後半 2 曲目 Mambo Inn でスモークの演出中、ホーン隊が 2 階通路から入場、大いに観客を沸かせる。上の写真は本プロ最後の曲「上を向いて歩こう」



田谷 紘夢 Hiromu Taya



武本 和大 Kazuhiro Takemoto



調律：清水利夫

映像によるプロローグや客席も含めた照明の演出、ホール全体を縦横に使うことは通常、コンサートでは行いませんが、こうした演劇的な試みは、ホールにしかできないコンサートスタイルのひとつの試案と言えます。

ジャンルを問わずホールでのコンサートでは、観客は入場後明るい客席で日常を引きずりながら開演を待ち、一本調子で流れる注意事項を聴いた後、やっと本ベル。その後はじっと正面を向いて鑑賞するというスタイルです。

どこをみて 2 時間ほどを費やせるか…。見続けられる音楽愛好家ならずとも、初めて来た人が面白かったと思える体験にしたい…。耳だけでなく目に訴求する要素を取り入れることで、インスピレーションを得て異世界へと誘いたい…。帰路につく頃には、ライブに行ってみようと思う契機に…を意図するものですが、当然ながら曲のイメージは観客が自由に心に描くものであり、**演奏自体に干渉しないような配慮**を必要とします。

- 開演前及びセトリ最後の曲とアンコール以外は演奏中の背景は出さない。
- 演奏者を囲む距離の近い席を用意、ライブ的な要素を加味する。
- 後部客席でも手元がみえる臨場感を出すため、何曲か Go-Pro で映し出す。
- 登場シーンや照明などサプライズをいくつか準備する。



舞台：(有) アイジャクス
木原立春・横山弘之・原島和久・穂苅竹洋

REPORT



本プロ終演、万雷の拍手を浴びた。続くアンコール!の声援。



休憩時ドリンクサービス。小菓子和スパークリングワイン、コーヒー等を無料で提供。

これを実現するには、まず**観客の視点からストーリーを構築**、イメージを起こし、**出演者からのアイデア**を紡ぎ、**テクニカルスキル**を繋いでこそできるもの…性質の異なる2台のピアノをあたかもひとつの楽器のように響かせる調律、空間を変貌自在に操るライティング、生音が響いているかのように聴かせる音響、進行や展開を統合して司るステージオペレーションなど、演奏者や技術者との共創的な舞台制作には、企画を行うための新しい発見が常にあります。

加えてアンケートの中に散見されるのは、演奏はもちろんのこと、演出や仕掛け、照明や映像、座席の配置、ドリンクサービス、料金への高評価であり、ハードルが高いコンテンツでも、**アクセスしやすい試み**を取り入れることで、新しい観客層を魅了する可能性を示しているのではないのでしょうか。

アンケートにみる公演の評価と告知のあり方

311名中144名の回収結果であり、半分以上は未回収となりました。ピアノによるジャズ、ホールという制約のあるジャズに馴染めなかった人が一定数いた可能性がありますが、冒頭に述べた通り想定内の結果です。初めてジャズに触れた人からの好評をみる限り目的が達成されたとして良いと思われま。

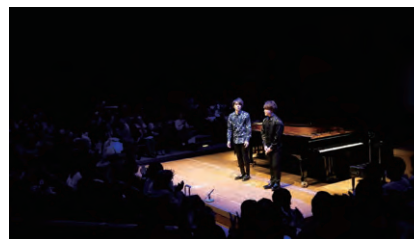
公演の告知は、Twitterで画像や動画を入れて早くから配信してきました。フォロワーの多い出演者では、情報はTwitterから拡散すると思われました。実際には、チラシから得た人が最も多いという結果でしたが、知人、出演者からの告知に印をつけた人も、SNSから入りウェブ上のチラシ情報にたどり着くのかもかもしれません。国立市内の人は半分、近隣市以外の他市や23区、神奈川、埼玉などから来た人が半分以上を占めたことは、**人的な働きかけやSNSでの告知の可能性**も示し、告知のあり方を示唆するものとなりました。



曲の背景は「Moon River」と、「上を向いて歩こう」のみ。



アンコール「Moon River」終了。



これにて本当に終演。ハケると同時に映画の終幕のようにエンドロールが流れる。



ゲスト奏者名やセットリスト、技術者、Special Thanksの協力団体名と続く。



CD販売。終演後にサイン会を行う。列に並ぶお客様が途絶えない…。

